

平成27年度

授業改善推進プラン

日野市立仲田小学校

1 方策の柱

基礎・基本の定着と学ぶ意欲の向上

- 授業の始め・終わりの時間の厳守や授業規律の確立
- 友達と協力して課題を解決する、主体的・協働的な学びを取り入れた学習活動の工夫
- 「東京ベーシックドリル」などを活用した、基礎的・基本的な事項の徹底
- ガイドラインに基づく習熟度別指導による、算数科の習熟度に応じた指導・学習内容の工夫
- 4～6年生で実施する各学力調査の分析結果に基づく、授業改善プランの策定・実施
- UD化の環境・授業づくりを推進し、すべての子供が参加でき、理解・習得・活用できる学力の育成

2 具体的な方策・取組

(1) 国語科の改善プラン

①「発表する」活動をすべての教科で重視する。

- 伝え合うことの楽しさや必要性を感じられるように指導し、ペア→グループ→全体（スピーチ・パネルディスカッション等）へと話し合いの範囲を広げる。
- 少人数で、言葉遣いや相手を意識した話し方に気を付けて話をする機会を増やし、考えていることや感じたことを人に伝える経験を重ねる。
- 話し合い活動の場面では、自分の意見を先に書いてから話し合いを始めるなど、自分の考えをしっかりと持ち、話し合いにすすんで参加するように指導を徹底する。
- 「発表する」活動は、国語科で系統的に学習するとともに、全教科、領域の学習活動の中で意識的に取り入れる。
- 日常的に自分の考えとその理由・根拠などを伝える活動を多く取り入れ、論理的な話し方を身に付けさせていく。
- 読み取ったことを自分の言葉で伝えたり、音読で表現したりして読みを深められる活動を多く取り入れる。
- 役割演技や動作化、吹き出しへの書き込みなどを行い、興味をもって授業に参加できるようにする。
- 市の「プレゼンテーション大会」などの機会を積極的に活用して、児童の発表力を伸ばしていく。

②ことばの学習の充実を図る。

- 『マイ・辞書』（3年・国語辞典 4年・漢字辞典）をもたせることを推奨したり、教室に常備したりするなど、日常生活の中でも辞書を活用し、語感を育て、語彙を増やす。
- 漢字やカタカナは、ドリル・小テストやプリントを活用し、くり返しの練習を重ねる。
- 日常的に音読やスピーチ活動などに取り組み、話し方や聞き方についての力を育てる。
- 文脈の中で、漢字を正しく読んだり、書いたりする力を育てる。
- 「学期末漢字50問テスト」へ向けて、意欲をもって学習を継続させる。また、児童全員が満点をとるまで再テストをしていく。
- 言葉の意味調べ、教材で扱った言葉や新出漢字を使った短文作りをさせるなどして、言語についての興味・関心を高めるとともに、理解を深めさせる。
- 新出漢字や初めてのひらがな・カタカナの学習では、毎日の家庭学習の中で、家庭と連携を取りながら繰り返し練習をして確実に身に付けさせるようにする。
- 漢字検定を学校内で実施することにより、受験者を増やし、漢字学習への関心・意欲を高めるとともに、検定に向けての学習を積ませることにより漢字に対する能力を高める。
- ローマ字の学習については、パソコンの授業を通して練習の時間を取り、定着させていく。

③読書の習慣を付け、読書量を増やす。

- 朝の「チャレンジタイム」に朝読書の時間を取り入れ、読書の習慣を身に付けさせる。
- 読書に興味をもち、すすんで読めるように、読み聞かせ・ブックトークなどを取り入れる。
- いろいろなジャンルの本の紹介を行ったり、読書貯金を行ったりして、たくさんの本を読む環境をつくる。
- 図書室を大いに活用し、自分が興味をもっている分野だけでなく、普段手に取らないような本に触れさせる機会を意図的にもたせていく。
- 春と秋に読書週間を設定し、読み聞かせや本の紹介、教員による「おすすめの本」の

冊子の刊行、図書委員会による本の紹介・読書郵便等の活動を行う。また、「親子読書」の取組を行い、家庭での読書の習慣を身に付けるための啓発を行う。

- ・PTAに協力を呼び掛け、朝の時間帯に保護者による読み聞かせを定期的に行い、本への関心を高める。

④「書く力」を高める。

- ・書く活動を通して、常に相手や目的を意識させる（メモの活用方法を知る、作文の構成を考える）。
- ・短文作りや授業で共通体験したことを文章に表す学習の機会を増やし、書くことに慣れさせる。
- ・作文指導では、必要に応じて事前に例文やヒントなどモデルを多く提示し、書く内容や順序を考えやすくする。
- ・作文指導では、書き出しやテーマの工夫をすることで、書くおもしろさを感じ取れるようにする。
- ・基本となる文型がはっきりと分かるように書くことを常に意識させる。
- ・客観的な立場で自分の文章を読み直させ、推敲できるようにする。
- ・言葉の意味調べ、教材で扱った言葉や新出漢字を使った短文作りを数多くさせる。
- ・全教科、領域において、学習記録や感想を記述して、文章に表す機会をできるだけ多く設ける。
- ・日記を継続的に書く習慣を付けさせる。短い言葉でメモを書き、伝えたいことの中心が伝わるように整理して書かせる。
- ・個別に添削指導をすることで、文法的な間違いや表現の仕方等を改善していく。

⑤「読む力」を高める。

- ・特に説明文において、どの学年でも児童の理解の過程を重視した授業を構造化し、自分で文章を読み取る力を付ける。
 - ①一文ごとの理解 → ②形式段落ごとの理解 → ③意味段落ごとの理解 → ④全文を通しての理解 → ⑤自分の言葉で理解したことを表現する → ⑥理解したことを友達と交流し学習を深める
- ・ワークシートなどを活用して、読み深めの活動を低学年から取り入れていく。

⑥「聞く」を高める

- ・話を聞くときの態度、話の中心や要点をつかみながら聞く聞き方などを指導していく。
- ・「聴写」を取り入れたり、大事な言葉を反復して話させたりすることにより、聞くことのトレーニングをする。
- ・「話す」学習と同時に「聞く」学習が生まれることを伝え、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして、考えをまとめさせる。

(2) 算数科の改善プラン

①既習事項をしっかりと確認し、基礎・基本の定着、活用を図る

- ・各単元の中で、折に触れて既習事項を復習し、確実な定着を図る。
- ・未習の内容に出会った時は、既習事項の中で類似したものを復習し、類推しながら新たな知識や考え方を見いだせるようにする。
- ・新しい単元に入る前には、プレテストなどを活用し、既習事項がどこまで身に付いているか、確認して学習のねらいを明確にする。

②ドリル学習や繰り返し学習により技能の習熟を図る

- ・チャレンジタイムでドリルやプリントを使い、繰り返し練習させたり、家庭学習で復習させたりする。
- ・計算などの繰り返し学習により、用いる演算が短時間で的確に処理できるようにする。
- ・計算手順を声に出して唱えながら繰り返し練習することにより、計算間違いを減らすようにする。

③数学的な考え方を育てる「学び合い」の学習を重視する。

- ・問題解決型の授業を取り入れ、1つの考え方で解けた児童には「どうしてそうなったのか」「他の考えで解いたり、他の表現方法を使ってみよう」など、多様な考え方をさせたり、よりよい考え方を見付けさせていくような、学び合いの学習活動を行っていく。
- ・計算練習（64マス計算等）→既習事項の確認→目標の確認（問題の把握）→自力解決（一人でじっくりと考える時間を保障する）→考えの発表（他者の考えとの比較検討）→まとめ→適用問題をやる→学習の振り返りをする。という学習の流れを大切にする。
- ・個人で考える場面、小グループで意見を出し合う場面、集団全体で考える場面など、単元や課題に応じて学習の場を工夫する。自分が考えた解決方法だけでなく、友達の解決方法を聞くことにより、様々な解決方法や表現方法・考え方があることに気付かせ、学習内容のより深い理解につなげる。
- ・公式や考え方を教師の方から提示してしまう場面を極力減らし、児童の考えをもとに学習を展開していけるよう、課題提示や発問を工夫する。
- ・児童が考えたことに対し、解き方を説明したり、わけ（理由）を説明したりする学習活動を積極的に取り入れる。答えの正誤よりも、考え方の過程や視点を大切にする。

④表現力・思考力を育てる学習を重視する。

- ・式を読む活動、式で表す活動を積極的に取り入れていく。
- ・数と計算の単元においては、計算方法のみを指導するのではなく、問題に示された数量を図に表すなどの活動を積極的に取り入れていく。
- ・自力で試行錯誤しながら問題を解く場面を多くの単元に設定する。
- ・自分の考えや友達の考え、学んだこと・分かったことなどをノートに書き留める習慣を身に付けさせる。
- ・板書を構造化したり、ノートの書き方を具体的に示し、ノート指導を重視する。
- ・児童の考えを組み合わせることで真理に近付き、達成感を味わわせる場面と定義をしっかりと考えて身に付けさせる場面とのメリハリを付け、考える場面に対して意欲的に取り組ませる。
- ・考え方の発表に関しては、正しい答えだけでなく、様々な発想をもっている児童を積極的に指名して、その発想を賞賛して、一つの課題に対して多様な考え方ができるようにする。

- ・ノート指導をとおして、多様な表現を用いて考え方を表現する方法を増やしていくとともに、友達の考えを繰り返して唱えるなどの訓練を積み重ねることによって、自分の考え方を説明することへの抵抗感を減らしていく。

⑤ ICT・具体物を用いた算数的活動を取り入れる。

- ・インタラクティブスタディなどのコンピュータソフトを活用し、ドリル的な反復学習・既習事項の復習・発展学習を個人の学力レベルに応じて学習を展開する。
- ・みエルモン・かけるもんなどの投影機器を活用して、個々の多様な考え方を学級全体に提示することにより共有化を図り、互いの考え方のよさに気づき、高め合う学習を展開する。
- ・日常の事象と教材を結び付けることで、算数活動の楽しさや、数理的な処理のよさに気付いていけるようにする。
- ・具体物等を用いた活動を通して、問題の意味や立式の仕方を理解させていく。
- ・具体物を用いた活動を通して、生活の中で意識的に体験する機会を増やしていく。
- ・具体物の代わりとなる絵・写真・図表などをパソコンとプロジェクターを使って拡大投影して授業への関心を高め、理解を高める。

⑥ 作業的・体験的な算数的活動を取り入れる。

- ・おはじきを並べる・実物を使う・物をつくる・実物を計る…………… など、実際に作業したり体験したりすることにより、理解を容易にしたり深めたりする。
- ・体験的に学んだものが、論理的に理解できるように、単元の中で、あるいは1単位時間の中で、体験的な活動と説明する時間を随時組み合わせる。
- ・授業で学習したことを、日常生活に置きかえて考えたり、日常生活の中で活用したりする機会を多く取り入れる。(時計の学習では、日常生活の中で時刻や時間を問う機会を意図的に増やし、感覚を養っていく。長さの学習では、日常の中で長さを測ったり、体を使ったおおよその長さで、長さを予測したり、測定したりし、活用したりする。)

⑦ 一人一人の習熟度に応じたきめ細かな指導、個別指導を充実させる。

- ・習熟度に合わせて、学習内容を吟味・精選し、十分に考え理解する時間を確保する。
- ・学習の理解度や進捗状況に応じて、適用問題・発展問題の量を吟味・調整して指導し、学習内容の理解をより確実にする。
- ・習熟度の差が大きいクラス編成の場合及び低学年では、学力向上支援者を活用して、できる限り個別の対応ができるように配慮をする。
- ・リソースルームティーチャーと連携し、当該学年までの既習事項が身に付いていない児童には、つまづいているところにもどって、マンツーマンでじっくり時間をかけて繰り返し学習する。
- ・授業後、一人一人の理解度をチェックして、次時の指導に生かす。
- ・発展的学習などを希望する児童が意欲的に取り組めるよう、ICTを活用する。

⑧ 東京ベーシック・ドリルを活用する。

- ・習熟度別指導が効果的に行われるよう、3年生以上で東京ベーシック・ドリルを取り入れ、「診断シートで定着」「解説シートで確認」「練習シートで繰り返し練習」を授業・補習・家庭学習などで活用を始める。
- ・算数での活用の成果や問題点をもとに、1・2年生や・他教科(国語・社会・理科)での活用方法を検討していく。

⑨ ガイドラインに基づく、習熟度別学習を充実する。

- ・3年生以上は、習熟度別担当教諭も含めて、2学級を習熟度別に「補充コース」・「基

本コース」・「発展コース」の3クラスに分け、児童の理解や習熟の程度に応じた学習集団を編成する。

- 児童の理解や習熟の程度等の状況を把握するために、単元に入る前などに実施するレディネステストや過去の調査結果等を基に、考えられるつまずきに応じて、どの段階に立ち戻って知識・理解や技能の学び直しをする必要があるのかを把握し、反復学習等による補充的な指導を取り入れる。
- 「補充コース」については、学力向上支援員を活用することで、個別指導に近い体制を作り、個人の特性に応じた指導を行う。学習の遅れやつまずきのある場合、必要に応じて前学年までの内容に立ち戻って、学び直しを行いながら、基礎基本の習得を目指す。
- 「発展コース」については、教科書内容の習得を基本とした上で、難易度の高い発展的な問題を解かせるだけでなく、児童が導き出した答えが、「なぜ、そうなったのか」という根拠や理由を説明する学習を取り入れる。また、解答を導き出す過程で多様な考えを出させ、集団で共有し考え方の幅を広げるなどの学習も重視する。

(3) 理科・社会科の改善プラン

①体験を生かした学習を取り入れる。

- ・地域探検や農家、スーパー、コンビニ、自動車工場、クリーンセンター、下水処理場などの、身近な施設を見学し、生活と関連させて意欲を高める。
- ・出前授業の活用やゲストティーチャーを招聘し、専門家から話を聞き、理解を深める。
- ・地域教材を活用したり、フィールドワークを取り入れるなどして、生活科から社会科の移行をスムーズにする。
- ・見学をするときの視点を明確にすることや、記録のとり方について具体的に指導する。
- ・社会的事象への関心をより高めるために、学習している内容が自分の生活とどれだけ密接に関わっているかを実感させるように体験的活動を取り入れたり、具体物を活用したりする。

②資料活用の技能（社会）を育てる。

- ・他教科との関連を図り、理解を深める。例えば算数科におけるグラフを読み書きする単元と関連して、統計資料から読み取り、判断する活動を取り入れる。
- ・教科書や資料集に掲載されている資料を読み取る活動を定期的に取り入れる。その際、複数ある資料の中から児童の興味・関心により選択させる。
- ・課題を解決するためには、資料から多くの情報を得ることができ、さらに思考を広げていくこともできることを実感させる。
- ・資料を活用して新聞にまとめる、資料から分かったことに対しての自分の考えをもつなどする活動を意図的に設定し、資料の読み取りを通して考える力を育てる。
- ・習得した資料活用の技能を「総合的な学習の時間」の探求活動に生かすことにより、スパイラルに力を高めていけるようにする。

③科学的なものの見方・思考（理科）を育てる。

- ・問題解決型学習を中心に「はっきりさせたいこと」を明確にし、学習課題から個人で予想を立てさせる。どうすれば学習課題をはっきりさせることができるかを考えさせ、実験や観察など、児童が主体的に計画を立てて学ぶことができるようにする。
- ・疑問を見付ける習慣を身に付けさせ、疑問を解決する手段として、実験・観察を中心とした活動を重視する。
- ・知識を確実に身に付けさせるために、理科ネットワークを有効に活用する。
- ・実験や観察に使う器具の正しい使い方について、中学年の段階から指導する。
- ・高学年の実験単元では、「問題」→「予想」→「実験」→「結果」→「考察」の流れを定着させ、事象を正しく見取る力、根拠を説明できる力を伸ばす。
- ・結果を予想する活動を重視し、個々の発想と科学的な見方や考え方を育てる。
- ・観察や実験で分かったことを言葉や図・グラフを用いて、観察カードやノートに分かりやすくまとめる活動を重視していく。
- ・問題解決の過程で、実験結果や表から分かったことを、文章でノートに書き表す活動を通して、考察する力を身に付けていく。
- ・実験後の考察を大切にし、友達との話し合いなどで考えを交流する時間を設定し、様々な考え方や見方ができるように指導していく。
- ・理科支援者の協力を得て、実験単元の充実を図る。
- ・ICT（理科ネットワークやWebのコンテンツなど）を活用し、学習資料を充実・補完し、児童の関心・意欲を高めるとともに、知識・理解の確実な習得を図る。

（４）UD化の環境・授業づくり

昨年度から、学級環境のUD化に全校で取り組み、講師を招聘して研修会を実施したり、視察などを受け入れ外部からの刺激も受けたりすることで、「授業に参加する」環境づくりの考え方を徹底した。全教科をととして「特別に支援を必要とする児童にとって分かりやすい授業は、すべての児童にとっても分かりやすい授業」を目指して、特別支援教育の視点に立った授業改善を図った。

- ・場の構造化 …… 整理整頓された、分かりやすい環境をつくる。
- ・刺激量の調整 …… 教室の前面・黒板には掲示物を貼らない。授業に必要な情報だけを提示するようにする。
- ・ルールの明確化 …… 学校全体のルールを明確にし、全校で徹底する。
- ・相互理解の工夫 …… 学習の場面で、助け合って課題を解決したり、個々が活躍したりする場面を意図的に取り入れる。

さらに今年度からは、環境だけでなく、授業そのものへの工夫を行い、すべての児童の学力向上への意識を高めるために、ひのスタンドの次の段階、「授業が分かる（理解する）」授業づくりの工夫へと高め、魅力ある授業づくりを進める。

- ・焦点化 …… 授業における学習内容の本質を見極め、ねらいを明確にして、学ばべき事柄を一点に集中し、授業をシンプルにする。
- ・展開の構造化 …… 何からどのように体験させるか、説明するか、焦点化した内容を伝えるのに最適な展開を精査し、根拠をもって決定する。
- ・共有化 …… 「協同学習」や「学び合い」を取り入れ、互いの考えを伝え合ったり確認したりする活動を大切に、友達の考え方を自分の意見のモデルや下敷きにして、自分の考えを深める。